

書 評

宋基燦著 (2012)
『「語られないもの」としての朝鮮学校 —— 在日民族教育
とアイデンティティ・ポリティクス ——』
岩波書店、262頁

柳 美 佐

日本国内には数多くの外国人学校が存在するが、その中で最多の生徒数を持つのが、朝鮮半島にルーツを持つ児童生徒が通う朝鮮学校である。本書は韓国出身の韓国人研究者が3年以上の歳月をかけて朝鮮学校で行ったフィールドワークをもとに、朝鮮学校における民族教育の実態と、そこに通う児童生徒達のアイデンティティについて分析したものである。本書は、2009年11月京都大学に提出された博士論文をもとに書き直されたもので、次の四つの章から構成される。

まず序章では、1997年に著者が初めて来日した際に在日コリアンの問題に興味を持ち始めたことから始まる朝鮮学校との出会いが述べられる。ここで著者は、韓国人研究者である自分が「研究対象の朝鮮学校と総聯系在日コリアンに対して、それからその物理的背景になっている日本という国に対して抱いている感覚」、また著者自らのアイデンティティについて詳細に述べている。その上で著者が直面した、人類学におけるフィールドと研究者の立ち位置の難しさや、その可能性と限界を丁寧に記述している。

続く第1章では、ポストコロニアル時代における抑圧と支配により周辺化され弱体化された被植民者である在日コリアンが、自らのアイデンティティ回復の手段として展開してきた「積極的抵抗」が、ファノン (Frantz Fanon) のいう「手段としての暴力」に近似しているとす。また、重層的抑圧構造の中で「沈黙」を強いられる従属的な被植民主体「サバルタン」に目を向けたスピヴァク (Gayatri C. Spivak) を引きながら、日本社会における在日コリアンの「サバルタン性」を指摘している。著者は、日本という国家システムにおいて従属的主体である在日コリアンが、朝鮮人としてのアイデンティティを構築することで、日本社会を生き延びるための力になりえるのではない

かと問いかけ、朝鮮学校が「サバルタンではない存在の経験をさせてくれる」場所であると述べている。

第2章の前半では、戦後の在日朝鮮人運動史を通して、現在までの在日コリアンの歴史が民族教育の歴史であることを印象づける。在日朝鮮学校は、戦後、祖国への帰国を前提とした朝鮮語教育のために作られた「国語（朝鮮語）講習所」としてスタートした。解放直後に成立した民族団体「在日朝鮮人連盟（朝連）」はこの時期、「朝鮮人の生活と人権を守ることに力を注ぎながら、民族教育のために民族学校の設立を積極的に推進した」とされている。自らを解放国民と認識した人々の熱意が民族教育に対する熱意となってあらわれ、戦後約一年が経った1946年9月末には「日本全国に525の初級学校と4つの中級学校、12の青年学校が創設されるという急激な拡大」をもたらすことになった。その頃にはすでに独自の朝鮮語教科書が作られ使用されていた。しかしその後、1948年の「朝鮮人学校閉鎖令」を皮切りに在日コリアンの民族教育は幾度も弾圧されることになる。また公立朝鮮人学校という日本の公教育制度の中での同化教育も、1952年サンフランシスコ講和条約の発効後、在日朝鮮人の日本国籍が一律に剥奪されることで、一転して閉校となった。著者のいうように、1945年から10年間の日本政府の対応を見ると、「在日朝鮮人は日本国籍者であることを理由に朝鮮人学校を閉鎖し、1952年以降には外国人だからと公立学校は不要という理由で再び朝鮮学校を閉鎖した」ことになる。その頃朝鮮半島では、1948年8月に大韓民国政府が、同9月には朝鮮民主主義人民共和国がそれぞれ樹立している。日本政府の干渉から民族教育を守り、学校を再建しようとした在日コリアンの窮状に、救いの手をさしのべたのは共和国であった。1957年4月、当時の金額で1億2,000万円という巨額の「教育援助費と奨学金」が送られてきた。この事実は在日朝鮮人たちに「祖国」の存在の大きさを決定づける機会となった。これ以降、朝鮮学校の全般的な教育路線が、共和国の支配管理体制に従属するものとなった。本書では、このような経緯をたどりながら「在日朝鮮人の運動と民族教育が、人種主義による排除と弾圧によって追い込まれる中で、朝鮮民主主義自民共和国という国家主義と出会い、意図せざる結果として総聯と朝鮮学校が成立したとみるべきである」と指摘している。

第2章の後半では、フィールドワークで観察された現在の朝鮮学校の姿を描いている。著者が主要なフィールドとしたのは、在日コリアン人口が多い関西地域の朝鮮学校で、その中でも「比較的開放的」な大阪市内の朝鮮初級学校である。本書の指摘するように、朝鮮学校の教育現場に対する実証的研究があまり存在しないのは、朝鮮学校のもつ閉鎖性に原因があるのは確かである。著者はその閉鎖性の原因が「朝鮮学校

を治安管理的対象として持続的に管理・抑圧してきた日本政府」にあること、また朝鮮半島の分断により在日コリアン社会にも民団（在日本大韓国民団）と総聯（在日本朝鮮人総聯合会）という分断が生じ、互いに現場に容易に接近できなかったことをあげる。本書では、時間をかけて朝鮮学校教員や児童生徒達との関わりを築き、学校現場に通った韓国人研究者の目を通して観察された民族教育の一端が、リアルにそして誠実に描き出されている。朝鮮学校の「異端者」として取り上げられる帰化生徒や韓国からの転校生、中国朝鮮族生徒や日本人保護者の語りは、在日朝鮮学校で実施されている「朝鮮語や朝鮮文化を通した朝鮮人教育」が必ずしも普遍的なものではなく、あくまでも旧宗主国である日本の社会構造の下におかれた在日コリアンに対する民族教育であることを物語っている。

最後の第3章では、朝鮮学校を実践共同体として捉え、児童生徒達にとっての朝鮮語使用の意味と、彼らのエスニック・アイデンティティについて考察している。中でも、彼らの生きる「二つの言語世界」と「アイデンティティ・マネージメント」に関する分析が特徴的である。

朝鮮学校は開校当初から初中級課程において集中的に朝鮮語教育を行ってきた。第二言語としての朝鮮語習得を促すため、日常的な学校生活においても朝鮮語使用が推奨され、日本語は極力排除される。このようにして習得された朝鮮語が在日コリアンコミュニティ内で「公的言語」としての地位を持つことは、これまでに研究によって明らかになっている。本書ではこの現象を、「朝鮮学校という共同体の内部において、熾烈な朝鮮語教育の実践と集団主義が抑圧的に作用している」と分析する。

朝鮮学校はこれまで、日本社会の植民主義的暴力と差別に対抗する手段であった。そして「国家システム」の枠組みから排除され、どこに帰属意識を持つべきか悩む在日コリアンにとっての「解放空間」として存在していた。そこで行われる朝鮮語教育は、彼らに朝鮮人としての矜持を持たせるための、最も有効な、そして唯一の手段とみなされてきたといえよう。しかし本書では、『「日本社会の中で民族を守る」という日常化された危機意識』が、朝鮮学校の教育の共同体主義的イデオロギーを強化していることが強調される。また、民族教育の崇高な理念を体現するために「朝鮮民族としての生」を校内で否応なく体験させる集団主義の中で、個人が抑圧されうる構造があることが明らかにされている。序章にもあるように、被抑圧者が抑圧者に対抗するために「民族や祖国を本質的に捉える観念的言説」を強調する戦略的アイデンティティの構築が、同時に「在日コリアンとしての差異を持つ可能性を抑圧する」という、朝鮮学校の抱える問題をあぶり出したという点において、著者が学校内部の抑圧的構造

を指摘した意味は大きい。しかし朝鮮学校がなぜこのような教育方法を採用してきたかを考えるとき、我々は旧宗主国である日本においていまだに根強く存在する差別と同化圧力の暴力性から目をそむけるわけにはいかない。

一方で、強い集団主義の傾向があるにもかかわらず、朝鮮学校の児童生徒のもつ「柔軟でしなやかなアイデンティティの可能性」についても本書では言及している。著者は、朝鮮学校という公的領域における朝鮮語での活動が「演劇的」とであると指摘する。また、学校での民族教育を通してその価値を内面化している児童生徒にとって朝鮮学校は、仮想の世界ではなくて「リアリティに満ちた生の空間」であるとも述べている。彼らが二つの言語世界を「非常口」から行き来するのは、抑圧に対する自己防衛的実践であると分析する著者の独自の視点は興味深い。その一例として、朝鮮学校の生徒達がファミリーレストランで通名を使用する場面が紹介される。朝鮮人であることをカミングアウトする「本名宣言」実践にみられるように、在日コリアンの通名（日本名）使用を否定的にとらえる教育関係者は多い。しかし本書では朝鮮学校の生徒が「ここ（ファミリーレストラン）は日本だから」と、場面によって複数のアイデンティティをストレスなく使い分けている姿が描かれる。著者はその様子を、彼らが「綱渡りをするようにうまく均衡をとりながら、この世（システム）を渡っていく」と述べている。このような「アイデンティティ・ポリティクスからアイデンティティ・マネジメントへ」というとらえ方は、これまでの朝鮮学校研究ではほとんどみられなかったものであり、特筆に値するであろう。

ここでの「アイデンティティ・マネジメント」は、単なる「戦略」を越えて、育てられた「能力」に近いものであると著者は看破するが、これは「抑圧の構造」がいまだに健在であることに他ならない。日本社会で生まれ育ち、旧宗主国の言語で主体化するしかない在日コリアンは、どのようにして自らのアイデンティティを獲得するのか。差別と抑圧的構造の中で彼らが「サバルタンの存在」である限り、民族的アイデンティティの確立を求めるマイノリティの解放区として、朝鮮学校は必要であろう。

共和国と対立している韓国には「国家保安法」という法律があり、韓国の国民が共和国関係者と会合を持つことを禁じている。韓国政府にとっては、共和国を「支持」する総聯系在日コリアンや朝鮮学校を「敵性集団」と認識することも可能である。そのようなフィールドに、韓国人研究者である著者が関わることにどれほどの勇気が必要であったかは想像に難くない。本書では、これまで「部外者」には明らかにされてこなかった、生徒や保護者の学校に対する否定的意見や教員の抱える葛藤がいくつか

紹介される。それらに対する関係者からの批判を充分理解した上で、著者は「朝鮮学校のありのままの姿を肯定する新しい視覚を発見する」ことに本書の意味を見いだそうとし、丹念な叙述と分析を通してそれに成功している。ポストコロニアル的構造の中で主体化された朝鮮学校関係者や日本人研究者とは異なる視座を提供している点で、本書は在日朝鮮学校研究の際に手に取るべき必読書のひとつにあげられる一冊であるといえよう。全体を通して浮かび上がるのは、国民国家という普遍化されたイデオロギーのもつ頑強な抑圧的構造と、その中で生き延びようとする人々の姿と抵抗の歴史である。本書で描き出される朝鮮学校の日常は、一方で日本社会の姿をも生々しく映し出す。朝鮮学校は日本社会の鏡像として存在している。「マネジメント」しなければならぬ児童生徒達のアイデンティティは、彼らだけに課された問題ではない。

(京都大学 人間・環境学研究科 博士後期課程)